

『鍼灸要法』について

宮川 隆弘

日本鍼灸研究会

『鍼灸要法』6巻は江戸中期の1686（貞享3）年に著者の序を附して初刊され（題箋は「新編鍼灸要法」）、1720（享保5）年に重刊された。重刊の時の題箋「新編鍼灸要法指南」から「鍼灸要法指南」とも呼ばれるが、両者に異同は無い。著者・岩田利斎（生没年未詳）は序文から京の人であることがわかるが、その事績などは不明である、

巻之一は76項に分けられ、最初の5項で医の倫理、診察、予後、脈診、腹診に触れたあと、鍼法について57項、鍼灸禁忌について14項にわたって述べている。概ね各項の末尾に典拠とした医書や鍼灸書を挙げる。

巻之二は14項に分けられ、灸法全般と四花患門などの奇穴の取穴について述べている。

巻之三は21項に分けられ、仰人と伏人の部位の図を載せて部位を注解し、仰・側・伏の三人図を載せて骨度を述べ、臓腑図を載せて臓腑の解説を行い、最後に臓腑の内景図である「内景正人蔵之図」「内景伏人蔵之図」「内景側人蔵之図」の3図を載せている。「内景正人蔵之図」「内景伏人蔵之図」以外の図は、『類経図翼』に依る。

巻之四は14項に分けられ、経絡の流注と孔穴の部位や取穴を述べている。流注図、流注、取穴法については、『十四経發揮』を骨子として、各孔穴の説明では、時に『類経図翼』『黄帝明堂灸経』『鍼灸聚英』などを引いて異説を紹介している。

巻之五ではまず本巻及び次巻所載の主治穴の経脈所属表記法が図解されている。主治穴名の上下左右に圈円を記し、その位置と黑白によって所属経脈を表示する方法の解説である。白丸は陽経、黒丸は陰経をあらわす。本巻は100項に分けられ、100種類の病症について、病症の解説、主治穴、不治の症状についての説明がある。病症のうち、著者に治験例がないものや不適応なものについては、「鍼灸未試」「鍼灸に不宣」などと指摘している。本書と同時期の総合的な鍼灸書である『鍼灸拔萃』と比較してみると、病症数も多く、一病症の中でも更に病症を細分して、それぞれに主治穴を列挙している。時に、病症の定義について著者自身の見解を述べた部分も見られる。

巻之六は51項に分けられ、婦人病症23種類、小児病症28種類が巻之五と同様の体例で述べられている。婦人及び小児の病症数とその解説文はかなりの量にのぼり、当時の婦人や小児に対する鍼灸治療の実際を示す貴重な内容となっている。

本書の大きな特徴は、鍼灸全般の基本的な事項について、明代までの多数の医書や鍼灸書を引き、更に検討を加えることができるように配慮している点にある。また、臓腑経絡及び孔穴についての解説においては、当時、最も標準的な中国鍼灸書と見なされていた『十四経發揮』及び『類経図翼』をベースとしている。また、病症別の治療の記述を見ると、単に対処方法、主治穴を述べるのみならず、不治の病症や著者の経験を述べている箇所が少なくない。したがって、本書は、岩田利斎が単に中国の医書や鍼灸書を機械的にまとめて構成されたものではなく、医学書に精通し、十分な経験を踏まえて著述されたものであることがわかる。

『鍼灸要法』は、江戸時代中期初頭に成立した和文形式の鍼灸入門書であり、その内容は鍼灸の基本的な事項から臓腑経絡及び孔穴に及ぶ、充実した内容であるのみでなく、著者の経験を包括した鍼灸治療が述べられた優れた鍼灸書であると考えられる。また江戸時代中期初頭の鍼灸を考究する上においても重要な資料であると考えられる。